随想　東日本大震災と原発事故で思うこと

～復興に向けてどう振る舞うか～

加藤　宏光

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分に激震が東北・関東を襲った。著者の研究所は福島県の中央部二本松市に所在する。携帯電話への地震警報の六秒ほど後にかなりの地震が来た。これが一六秒続いたあと、本震が襲ってきた。先月に宮城沖で地震が起き、五〇㌢㍍あまりの津波で養殖漁業にかなりのダメージがあった、という報道を思い出して、震源地は宮城沖であると確信した。

通常大きな地震であっても初期微動を含めて一分程度でおさまるものである。しかし、この地震は二分たっても一向に静まる気配がない。二階の窓から見渡すと眼下の駐車場では車が跳ね踊っているように揺さぶられているし、その向こうに広がる畑は地震で波打っている。遠景の安達太良山は山頂が雲と舞い散る雪で見通せない。あまりに激しく長く続く激震に、「これに連動して安達太良山が噴火すれば、おしまいだな…」等とイメージしながら、ラボ（研究所）から飛び出してあまりの恐怖にパニック状態となっている女性スタッフを見ていた。

さしもの激震も数度の震度五ほどとも思われる余震を伴いながら、徐々に静まってきた。当日出張に出ていた男性スタッフも、ほうほうの体で帰社してきたため、ホッと安心し、拠点としている郡山市へ帰宅途中で燃料を満タンとした。著者の信条として、燃料タンクを空にして夜中を過ごさないことにしている。この習慣がこの際の危機を救うことに繋がった。東京へ戻る前にテレビをつけて初めて青森、宮城、福島から関東へ及ぶ、信じられないほどの津波の恐ろしい映像を目にした。当然、高速道路は閉鎖、新幹線もストップである。かくして、福島における大震災後の生活が始まった。二本松（ラボ）は停電、郡山（自宅）では通電しているものの断水である。二本松のラボでは水源が井戸であるが、停電時では通常のようには使用できない。幸い、二㌧あまりの貯水槽を経てラボ全体へ給水しているシステムであるため、郡山で使用する水はポリタンクで運べば、何とかなる。そこで、翌日ラボへ出かけた。スタッフが四人来ている。停電でラボが機能停止しているにもかかわらず…。そこで、持参した米を炊くことにした。水があれば石油ストーブの上ででも飯は炊ける。でき上がった飯を卵かけにして皆で食べた。同じ釜の飯を食うことで連帯感が生まれる。四時間ほどそうこうしているうちに電気が通じた。大震災の翌日に通電となれば、極めて幸せな環境である。水を五本のポリタンクに入れて持ち帰って、留学生との生活を始めた。いずれにしても燃料の入手が困難である。続いておきた原子力発電所（原発）の爆発事故。反射的に思い出されるのは、チェルノブイリ（旧ソ連）とスリーマイル島事故（アメリカ）である。原発事故の経過については、報道によるものが情報源であるから、著者の方々の知るところと重なるため、割愛する。

月曜日に集まったスタッフに以下の指示をした。

①パニックに陥らないこと、②食料の入手が困難になる可能性があるため、出社前にスーパーを回るチームを編成、従業員の必要とする食料を

まとめて入手すること、③今ある油（石油、ガソリン、軽油）を一〇日間もたせるよう、出社は乗り合いで手持ちガソリンを節約すること、④実験や検査といった実務は延期し、デスクワークを優先して遅れた仕事を取り返すこと。

確認したところ、大震災の直後に満タンにしているのは、スタッフでほとんど皆無、数日出社すると枯渇するものが半数である。危機に対する意識の次元が異なることに驚く。

そして、本日（二〇一一年三月十九日）は大震災から八日目の土曜日、スーパーやコンビニもあちらこちらで営業を開始している。極端な燃料不足で、ガソリンスタンドの前に延々長蛇の列ができていることを除けば平穏な日常とも感じられる。

少し落ち着いた昨日からインターネットで大震災と原発事故の情報を確認してみた。以下に、国際世論を前提として、著者の所感を述べてみたい。

①今回の地震被害より津波被害の方がはるかに甚大で、あれだけの大地震後にちゃんと立っていた建物の多さから日本の耐震技術の高さがわかる、②一〇〇〇年に一回とも言われる大震災において、日本人の沈着で冷静な対応、礼儀正しく控えめな態度を世界が絶賛している、③原発冷却のための海水注入を東電・政府は躊躇した、④爆発した原発の使用済み燃料冷却に身を呈する人々に世界から賞賛の言葉が殺到、⑤原発事故対応にアメリカから技術グループ派遣の提案があったが政府と東電が拒否。アメリカの提案が当該原子炉廃用が前提であったためで、まだ使用できると判断した前者は提案を拒否、⑥使用済み燃料冷却のための海水注入アナウンスは当初、枝野官房長官が行う予定であったが、急きょ管首相が行うと言い出し、実行、⑦原発周囲の避難民は、困惑、⑧壊滅的な津波被害を受けた被災者たちは、それでも他人優先の謙虚さをもつ、⑨食料・燃料等生活必需品の被災地への配給が迅速に行えていない、⑩生活必需品（とくに食料）供給は、民間の熱意が先行、行政は追い立てられ、追随、⑪この状況を前提として関東圏でもガソリンや食料買いだめがひどく、需要に供給が追いつかない、⑫放射能汚染が農作物で確認、消費者の極端な買い控えが現れている、⑬この傾向は国際的にも顕著。ドイツ、フランスやアメリカ、中国、韓国で日本製食品を放射能モニタリング。

以上、三月二十四日まで。

津波被害を含めた大震災被害が一五～二五兆円（原発被害を除く、阪神淡路大震災では一〇兆円とのこと）、原発被害は補償を含めて二兆円程度と見積もられている（日経・三月二十四日）。著者の拠点が福島県であるため、どうしても原発問題に目が行きがちである。この国に政治的指導者が枯渇していることは、これまでにも知己に語ることが多かった。しかし、原発事故を含めて、今回のそれこそ未曾有の大惨事に際しての国の指導者たちと大企業首脳の態度に改めてその認識を強くした。とくに、これだけの大震災と津波で原発がある意味暴走し始めているにもかかわらず、アメリカからの廃炉提案に対して、この時代遅れの原発をさらに使い続けようとした、という⑤のエピソードを知って、呆れるより激怒の気持ちを抑えることができない。われわれ採卵養鶏業界ではラベルの表示違反と称して、身に余るペナルティを課せられている日常があり、リスク回避にどのようにシステムを組むか、どのようにそれを維持するのかというコストを背負った上でのシステム構築と維持に腐心している。日経によれば、東電がこの原発使用でカットできるコストは（火力発電に対比して）年間五、〇〇〇億円になる、という（日経・三月二十四日一面）。旧型原子炉を使い続けてコストを削減しようとする貧乏根性がいかに高く付いたのかを、責任者たちは肌で感じているのであろうか？　命をかけて、冷却水を注入している人たちは世界の尊敬を集めているが、社会的地位や報酬では今後も前者がはるかに優遇され続けるのであろう。少なくとも社会のリーダーであれば、いざ鎌倉の折に己が命を賭ける覚悟があって当然であろう。東北の広範囲なエリアで、壊滅的被害を受けた一般市民がけなげにこの復興に立ち向かいつつあることを知るにつけ、私たちがどのように振る舞うべきかを改めて考えさせられる。